

第4章 総 括

1 弥生時代後期から古墳時代前期の集落と生産域

耕作関連遺構 調査地北半部の1・2区周辺では、沢東A遺跡では希薄とみられていた弥生時代後期から古墳時代前期に帰属する遺物が、畝間溝や区画溝の可能性のある溝などに伴い多数出土した。周辺に同時期の集落が広がるとすれば、今回の調査区一帯はその生産域（耕作地）であった可能性が高い。

これまでも沢東A遺跡では第3次調査地点（小野ほか1995）や第5次調査地点（藤村編2012）におい

て古墳時代前期（大廓式後半期）の土器が出土しているほか、東側に隣接する川窪遺跡でも同時期の方形周溝墓の可能性のある溝を検出している（若林2008）。今回の調査区においても、3区SX2011などで見られるように、大廓式後半期の土器の出土は全体的に顕著であり、潤井川下流域における当該期の集落や生産域、墓域の広がりには今後も注意する必要がある。

2 沢東A遺跡の古式群集墳と古墳時代後期前半の地域社会

古式群集墳の発見 調査地南側の3区周辺では、沢東A遺跡では初となる、7基以上の小規模な円墳や土坑墓からなる古墳群が発見された。周溝のあるものはいずれも円墳で互いに近接して立地し、墳径は最小で2.8 m（SZ2002）、最大で11.0 m（SZ2004）と全体的に小規模ながらも大小の古墳で構成される点に特色がある。各古墳の周溝出土遺物の年代観から、古墳時代後期前半（TK47～MT15型式併行期）を中心に築かれた円墳群とみられる。いずれの円墳も埋葬施設は残っていなかったが、小規模な堅穴系の埋葬施設であったと考えられる。

以上の調査知見から、本古墳群は古式群集墳の新例として認識できる。古式群集墳とは、この時期に倭王権によって新たに掌握された有力集団の古墳群であり、新来の技術を携えた渡来人や武人の集団とも考えられている（和田1992など）。同じ潤井川の上流域に立地する富士宮市域の滝戸遺跡SZ02・03（原2021）と古墳の時期・規模ともに近似しており、潤井川流域の集団が共通した目的や背景のもとで、古式群集墳の採用へと至ったことが窺える。

沢東A遺跡の先進性 吉原津（現田子の浦港）に潤井川を通じて直結する拠点集落として、古墳時代中期後半（TK208型式併行期）に再び台頭した沢東A遺跡は、周辺遺跡と比べて大型の堅穴建物が集中するほか、当時最先端の地域祭祀に用いられた須恵器や子持勾玉・石製模造品の出土も顕著であり、地域内

でも極めて先進的な集団が居住した集落であったと考えられる（第64図）。特に潤井川と凡夫川の合流地点に近い第3次調査地点（小野ほか1995）は、大型堅穴建物や祭祀遺構が集中しており、5・6世紀代における沢東A遺跡の中核域とみてよい。

潤井川上流の大宮城跡、下流の中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡に同時期の集落が展開する状況から、沢東A遺跡の先進的集団が、潤井川流域の開発や水上交通の管理等に従事していた可能性も窺える。沢東A遺跡から2.5kmほど下流に6世紀前半頃に築かれた伊勢塚古墳（藤村編2012、円墳・径54m）を、潤井川流域の集団を統率した首長の墳墓とみれば、集落に近接する沢東A遺跡や滝戸遺跡の古式群集墳は、地域開発や食糧生産、交通管理等を担う実務部隊をまとめ上げ、首長を補佐した集団の墓域と考えられる。

新興の首長墳と古式群集墳 駿河・伊豆地域では、富士山の火山噴出物が南麓に降灰した5世紀末以降、それまで停滞していた古墳の築造が再び活発化し、40～50m級の前方後円墳や円墳等からなる中小規模の首長墳が、各河川流域・小地域単位で一斉に並立するようになる（滝沢2015）。特に東海では、6世紀中頃にミヤケ制にかかわる地域秩序の転換が始まったとされ（早野2005）、その前史として、各地における小型前方後円墳の隆盛にみられる新興首長層と倭王権との人格的結合に注意が払われてきたところである（鈴木2018）。

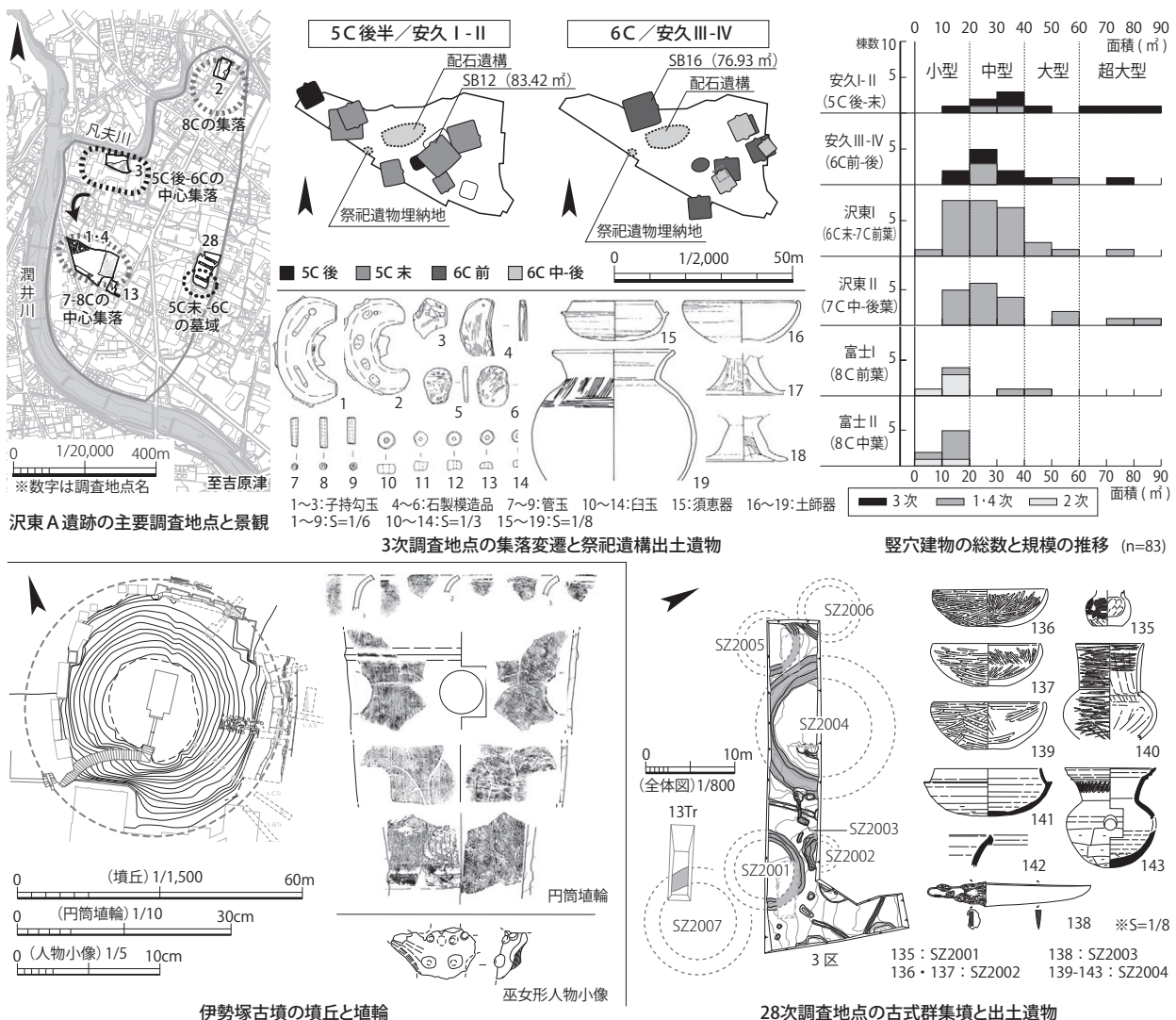
駿河・伊豆地域の古式（初期）群集墳については、若王子古墳群のように古墳時代前期後半から小型墳による群形成がみられる中で、倭王権との関係性や新興的な性格をどの段階から認めるのかについては定説をみないものの（村田 2002 など）、中期末～後期前半の例では墳形や規模等による階層性について理解が進んでいる（鈴木 2000、菊池・田村 2021 など）。

富士山南麓の潤井川流域から愛鷹山南西麓にかけての地域では、明確な古式群集墳の事例について認識が進んでいなかったが、近年に原悠翔が滝戸遺跡の円墳群に注目し（原 2021）、今回の沢東 A 遺跡の調査によって時期的にも明確な例が確認できたことを受け、見直しを図る必要性が生じている。これまでに横穴式石室を有さない円墳群が見つかったにもかかわらず、出土遺物が少なく評価が難しかった

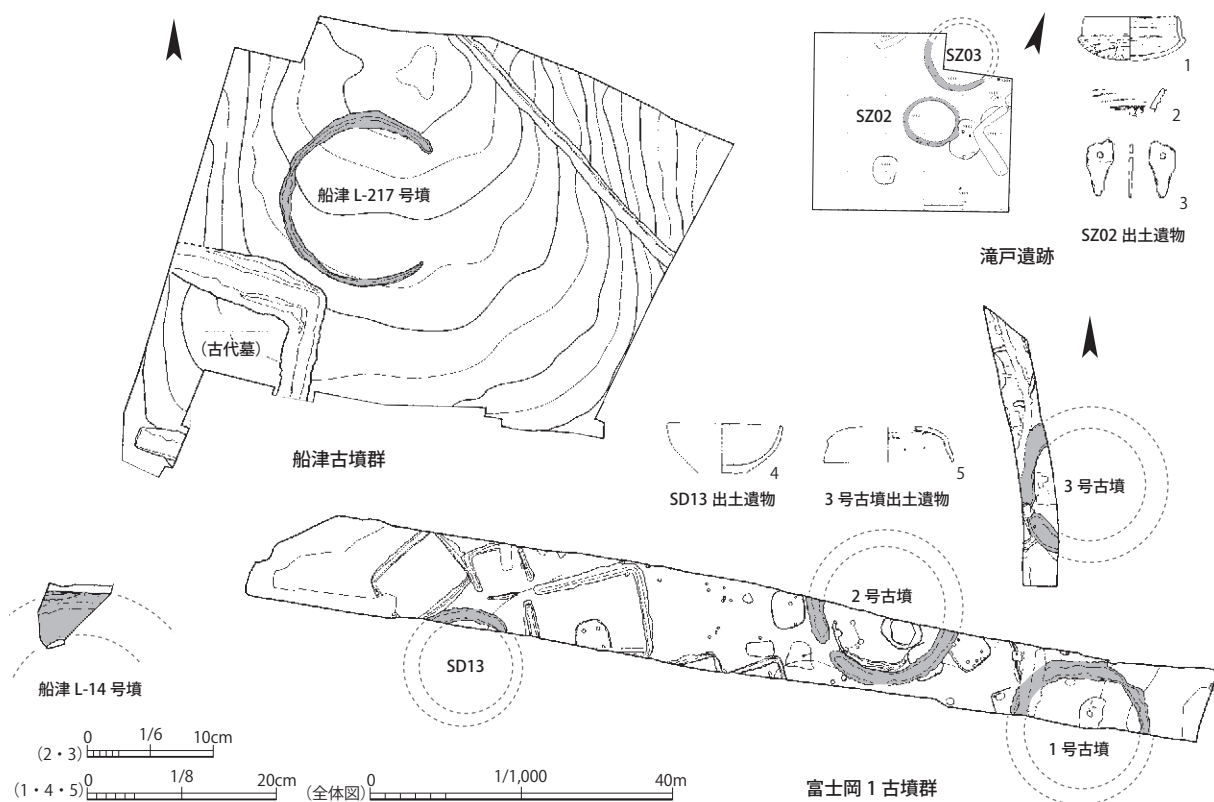
富士岡 1 古墳群（岩崎・西田ほか 2013）や船津古墳群（柴田・杉山ほか 2009）についても、古式群集墳として積極的に評価できる余地があるだろう（第 65 図）。

後期前半における地域秩序の形成 駿河東部・伊豆地域の古式群集墳とその可能性が高い古墳群の分布をみると、中小規模の首長墳と対応するようにして、小地域内に展開した状況が窺える（第 66 図）。伊豆地域の向山古墳群や多田大塚古墳群では同一群内において達成された墳形や規模による階層秩序が、潤井川流域や浮島沼沿岸においては単独立地の首長墳と古式群集墳の組み合わせにより、小地域単位で表現されていたことが想定されよう。

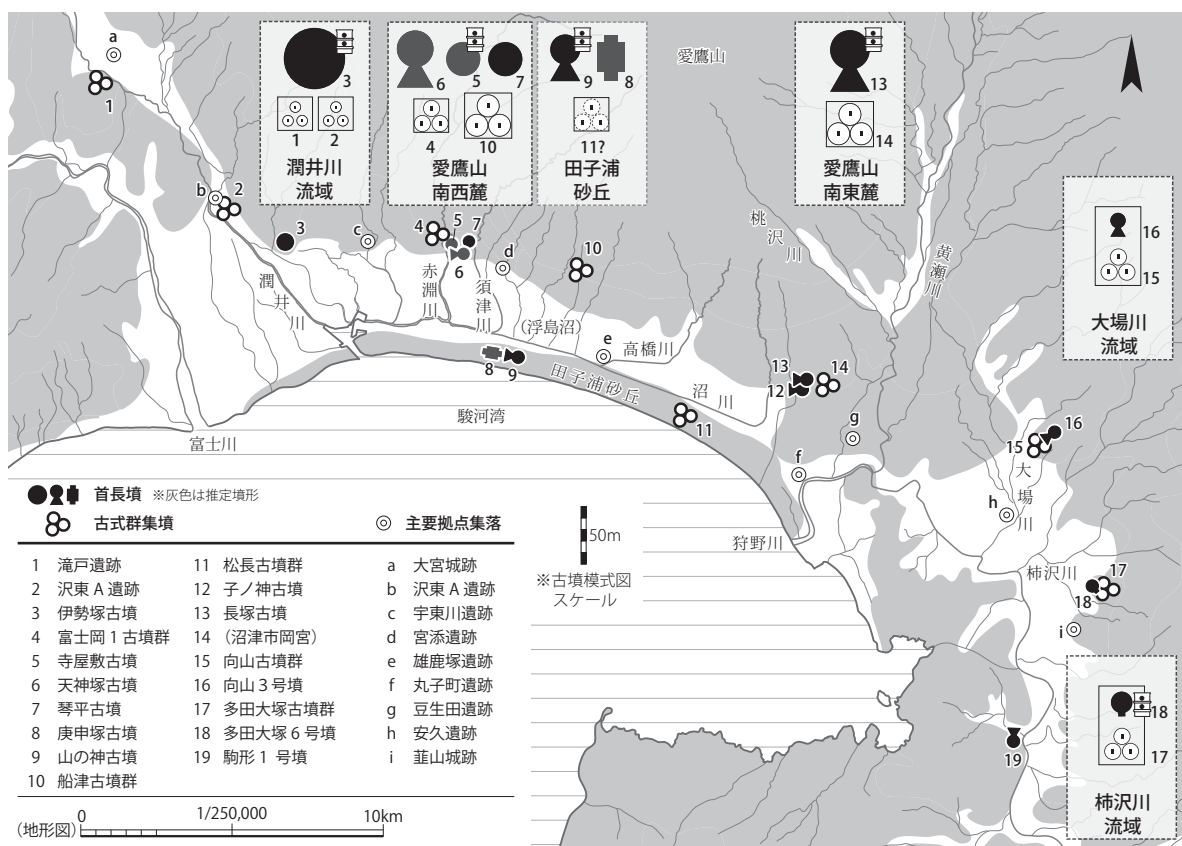
中期後半から後期初頭（TK208～TK47 型式併行期）は当地域における集落再編期にあたっており、併行して進められた低地開発や河川改修の成果が新興の



第 64 図 古墳時代後期前半における沢東 A 遺跡の景観と特徴



第 65 図 潤井川流域～愛鷹山南西麓における古式群集墳の類例



第 66 図 駿河東部・伊豆地域における中小首長墳と古式群集墳の秩序（5 世紀末～6 世紀中葉頃）

中小首長層の並立的台頭を促したとみられる（藤村 2017）。後期前半段階（TK47～TK10 型式併行期）には、各地の新興首長層を中心とする地域社会において、古式群集墳の被葬者集団が軍事面や地域経営の実務面で首長を補佐する体制が形成されていたと考えてよい。富士山噴火の傷が癒えない駿河東部地域周辺では、地域開発の需要と倭王権の勢力進展の意向が

3 古代末から中世の遺物と沢東 A 遺跡

古代末から中世の遺物 今回の調査地では、8・9 世紀の痕跡が薄弱であったものの、平安時代後期から中世の遺物や当該期の可能性のある遺構の存在を確認することができた。

まず、10 世紀以降に帰属する底部糸切未調整の土師器坏やかかわらけは、確認調査 12Tr（第 14 図 14）や 2 区 SX2003（第 39 図 99）、2 区遺構外（同 129）、3 区遺構外（第 63 図 196）から出土している。中世陶器としては、常滑産の甕（第 39 図 131、14～15 世紀頃）や片口鉢（同 132、13 世紀前半）が確認できたほか、

合致した結果（鈴木・田村編 2019）、上述した集団組織の編成が推進されたと評価したい。

今回の発掘調査により、当地域で初めて、まとまった土器群を伴って検出された古式群集墳は、5 世紀末から 6 世紀初頭という古墳時代随一の変革期における、富士山南麓の地域社会の動向を知る手がかりとして第一級の考古資料であるといえる。

貿易陶磁器として、確認調査 8Tr において龍泉窯系青磁碗（第 14 図 15、13 世紀後半）が出土している。

中世の沢東 A 遺跡 当遺跡では第 2 次調査地点において 12 世紀後半や 15 世紀の常滑産大甕を伴う土坑墓群が検出されている（前嶋・前田 1995）。今後は沢東 A 遺跡における過去の調査知見を、現代的な観点で再整理し、西岸の破魔射場遺跡・沢上遺跡等と比較することで、当時の交通の要衝でもある富士川河口部両岸に展開した中世の集落や墓域の実態に迫る資料として評価していく必要がある。（藤村 翔）

参考・引用文献

- 岩崎しのぶ・西田真由子ほか 2013『富士岡 1 古墳群他』静岡県埋蔵文化財センター
- 小野眞一・秋本眞澄ほか 1995『沢東 A 遺跡』富士市教育委員会
- 菊池吉修・田村隆太郎 2021「東海地域の群集墳—遠江・駿河・伊豆を中心に—」古代学研究会編『群集墳研究の新視角—群集墳からみた古墳時代の社会と集団』六一書房
- 佐藤祐樹・若林美希 2014「沢東 A 遺跡の成立と展開」若林編『沢東 A 遺跡 第 1 次』富士市教育委員会
- 柴田亮平・杉山和徳ほか 2009『矢川上 C 遺跡富士市—1』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木一有 2000「三方原古墳群にみる群集墳の構造」『プレフォーラム II 東海地方における群集墳の築造モデル』三河古墳研究会
- 鈴木一有 2018「東海地方における古墳時代後期の地域社会」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30 雄山閣、2019 年所収）
- 鈴木一有・田村隆太郎編 2019「討論：古墳時代後期後半の東国地域首長の諸相」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30 雄山閣
- 滝沢 誠 2015「古墳時代政治構造の地域的把握—駿河における大型古墳の変遷—」『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社

- 原 悠翔 2021「富士宮市 滝戸遺跡 SZ02・SZ03 の検討」『静岡県考古学研究』No.52 静岡県考古学会
- 早野浩二 2005「ミヤケの地域的展開と渡来人—東海地方における朝鮮半島系土器の考察から—」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム
- 藤村 翔編 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成 11・12 年度—』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態—古墳時代後期から飛鳥時代を中心に—」『東海における古墳時代の手工業生産の展開を考える』第 28 回考古学研究会東海例会（『東海における古墳時代の手工業生産の展開を考える／東海における古墳時代の土木技術を考える』考古学研究会シンポジウム記録 12 考古学研究会、2021 年所収）
- 前嶋秀張・前田勝己 1995『沢東 A 遺跡第 2 次調査』富士市教育委員会
- 村田 淳 2002「古式群集墳の成立とその性格—遠江・駿河の事例分析を通じて—」『静岡県考古学研究』No.34 静岡県考古学会
- 若林美希 2008『平成 17・18 年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』第 5 巻 近畿 I 角川書店